

ニュー・ヒストリシズム再考

—— 領域を越える批評 ——

福 岡 和 子

Stephen Greenblatt が1982年に、雑誌 *Genre* の特集号の序文で、“ニュー・ヒストリシズム” という言葉を始めて使ってから、今年でちょうど10年になる。もっとも Greenblatt 自身は、その名称を後には改めて、“cultural poetics” という言葉を使うようになった。しかし、その10年の間には、Catherine Gallagher, Walter Ben Michaels, Greenblatt らによって機関紙ともいえる雑誌 *Representations* も発刊され、相次いで歴史と何らかのかかわりを持たせた形の論文や研究書が次々と出版されてきたことは周知の通りである。こうした現象を、ニュー・クリティシズム以後4、50年もの間、非常に肩身の狭い思いをさせられていた歴史の復権と見ることは可能であろう。しかし、その急速で多種多様な論文の現れ方を見て、ニュー・ヒストリシズムは然るべき主張を持った文学理論ではなく、単なる実践に過ぎないのではないのか、ニュー・ヒストリシズムといいながら、新しい所は何もなく、むしろニュー・クリティシズム以前の旧態依然とした歴史批評と何ら変わる所がないのではという批判も同時に聞かれるようになったのである。Richard Lehan の批判は、その典型である。

わたしの考えでは、ニュー・ヒストリシズムは一つの運動としての一貫性を与える方法論をもっていない。このグループにはあたかもひとつの教義にくくられているかのようにみせた、文学作品とある時代の文化の個々ばらばらな一連の読みしかない¹⁾。

そこで、本論ではまず、ニュー・ヒストリシズムの“new”とは何をさしているのか、つまり従来の歴史批評と違うところは一体どこにあったのかという基本的な点にもう一度立ち返って考えていきたい。たとえ個々の読みに問題があったにしても、新しい歴史の概念の導入にこそ、そもそもニュー・ヒストリシズムが文学批評にあたえたインパクトがあったはずだからである。

(I)

Hayden White は、H. Aram Veesser の編集した『ニュー・ヒストリシズム』²⁾ の執筆者の一人であるが、その執筆陣の中では、文学批評家というよりは、歴史家、あるいは、歴史哲学者という点で異色の存在である。言い換えるなら White は、歴史家の立場からのニュー・ヒストリシスト達への良き理解者であり、また、その歴史観が少なからぬ影響を与えた人物といえる。ニュー・ヒストリシストたちが、文学の境界を取り払って歴史へ参入していったという言い方ができるなら、White は歴史の方から境界を取り払って文学へと入っていった歴史家だと言うことができるであろう。White の書いたものには、具体的に実践された文学批評よりも、ニュー・ヒストリシズムの理論的根拠となる歴史観が、より直截的な形で現れているので、彼の論拠を手掛かりにして“歴史”を再考してみたい。

White は、“The Value of Narrativity in the Representation of Reality” という論文³⁾の中で次のような年代記を引用している。

709. Hard winter. Duke Gottfried died.

710. Hard year and deficient in crops.

711.

712. Flood everywhere.

713.

714. Pippin, mayor of the palace, died.

- 715. 716. 717.
- 718. Charles devastated the Saxon with great destruction.
- 719.
- 720. Charles fought against the Saxons.
- 721. Theudo drove the Saracens out of Aquitaine.
- 722. Great crops.
- 723.
- 724.
- 725. Saracens came for the first time.
- 726.
- 727.
- 728.
- 729.
- 730.
- 731. Blessed Bede, the presbyter, died.
- 732. Charles fought against the Saracens at Poitiers on Saturday.
- 733.
- 734.

これは8世紀から10世紀にかけて、ガリア地方に起こった出来事を記した年代記、*the Annals of Saint Gall* と呼ばれるものの一部である。この年代記を見てすぐ気がつくことは、この社会が、洪水や飢きん、戦争などに脅かされた社会であり、極めて苦しい欠乏状態、崩壊寸前にある社会だということである。しかし、分かるのはそこまでであって、自然現象はともかくとしても、人間の生活にとって基本的な物の欠乏状態がどうして起こったのか、その結果はどうなったのか、どうすればその状態が癒されたのか、などについては一切のコメントがなされてはいない。たとえば718年の戦いがなぜ起こったのか、725年サラセンがなぜやってきて、またその結果がどうなったのか、722年になぜ豊作で、12年にはなぜ全土にわたって洪水が生じたのか、いずれも何の説明も行われてはいない。つまり、社会的な出来事も、自然界の出来事も同じ様に、人間の理解を越えたものとされているのか、どちらも同じ程度の重要性をもって

いるのか、いや反対にどちらも同じく重要性をもっていないのか、いずれにしても、年代記に記された出来事は単に出来事として記述されているにすぎない。特に注目すべきなのは、711, 713, 715, 716年などは、何も起こらなかったのか、全くブランクのままでも書かれていないことである。

Hayden White は、以上のような年代記の特徴が、逆照射して“歴史”とは何かをかえって浮き彫りにしてくれるのではないかと考えるのである。この記述の仕方には何かが欠如している、その欠如しているものこそが、我々が通常“歴史”と考えているものを成り立たせ、構成しているものではないのかと考えるのである。Whiteはその何かを“narrativity”（物語性）と呼んでいる。この年代記には、明らかに普通“物語”を構成する特徴——中心となる主題、始め、中、終わりという展開、語り手の声——などが全く存在していない。何よりも重要なのは、先に指摘したように、一つの出来事と他の出来事との間に連続性がない点である。出来事と出来事との間のギャップ、非連続性、因果関係の欠如、つまり、プロットの欠如にこそ、Whiteは、年代記がずっと後の歴史的言説と異なっている点があるという。

プロットをWhiteは次のように定義している。「プロットとは関係の構造であって、それにより一つ一つの出来事は、統合された全体の部分としての意味を付与されるのである。」⁴⁾ この定義において重要なのは“意味”と“全体”という二つの言葉である。出来事を記述する者が、個々の出来事に意味を見いだすことが出来るためには、彼が一つの全体の中にいなければならない。言い換えれば全体に対するパースペクティブをもった存在でなければならない、もしそれがなければ、年代記のように、個々の出来事がばらばらにいわば孤立したままになってしまうというわけである。このように出来事に意味を付与したり、またその意味によって出来事にランクづけを行うこと、つまり、物語的記述を可能にするものを、Whiteは、“a social system,” “culture,” ないしは、“a system of human relationship governed by law” といった言い方で呼んでいる。我々はさらにこれを“意味の体系”と言い換えてもよい。歴史家はそ

の意味の体系を“準拠の枠組み” (“a fixed reference point”) としながら出来事を判断し、本来ただ起こっているだけの出来事に一貫性 (“coherence”) や、終結 (“closure”) を与えていくのである。今私は「ただ起こっているだけ」と言ったが、実は、White は “imaginary” という言葉を使っている。彼によると、出来事が現実起こった、すなわち “real” だと言えるのは、それがある時ある場所で起こったからではなく、第一に、人間によって記憶されているからであり、第二に、起こった順序が分かるからであり、しかもそれだけでも不十分で、それに既に述べた意味での物語性が与えられているからなのである⁵⁾。

以上のような White の歴史観、それは従来の歴史観とは極めて異なる点に注意しなければならない。ここで念のためにまとめてみると、まず第一に、White は過去に起こった事は、そのまま歴史とは考えていない。既に過去の物である以上、現在にいる我々はそれを決して直接体験をすることはできない、つまり “imaginary” だということになる。言い方を換えれば、歴史は記憶され意味付けを与えられ記述されるというプロセスを取らない限り、我々には到達不可能だと言う見方である。第二の特徴は、この第一の特徴からすぐ引き出せるものであるが、現実に起こったことが歴史であり、作家の頭の中で考え出された絵空事、フィクションは、“imaginary” だとする従来の二項対立が完全に解体されている事を強調しておかなければならない。むしろ、歴史を歴史たらしめているのは、文学を文学たらしめているものと同じだという考え方がここにある。White がしばしば用いる、“plot,” “story,” とか、“narrativity” とかの言葉からも分かるように、White の歴史観の基盤には文学がある、いや、White にとって、歴史と文学との間にはもはや境界は存在しないといった方がよいのかもしれない。その根底にあるのは、歴史も文学もどちらも言葉によって織り成されたテキストだという考え方である。言い換えれば、文学もまたニュー・クリティシズムの考えたように、それ自体で自律完結した世界を形作る事はできず、社会というネットワークを構成する織り糸の一つに過ぎないの

である。そして、法律、政治、教育なども然りであって、Thomas Brook が引用した法律学者 Robert Cover の次の言葉、「いかなる法制度、いかなる法規も、それに位置づけを与え、意味を与える“narratives”を離れては存在しない。」⁶⁾は、まさしく White の歴史観が、歴史のみに当てはまるものではなく、社会を営む人間の営為のすべてにかかわるものであることを語っている。

(II)

さて、今指摘した歴史、つまりコンテキストもテキストだとする考え方は、実は重要な問題を含んでいる。つまり、テキスト—コンテキストのイデオロギー性という問題である。ここでも再び注意しておかねばならないのは、一方に、信頼のおける客観的なテキスト—歴史的ドキュメントがあって、他方に、イデオロギーにゆがめられた、当てにならないテキストがあるとする二項対立に基づく従来の歴史観は、White を始めとする新歴史主義者たちによって否定されているということである。特定のグループや、階級による記述のみならず、いかなる歴史的テキストも、言語という手段によって、“narrativity”として成立している限り、イデオロギー性を帯びてくるという考え方である。つまり、歴史の記述者がある出来事を記録するという事、それは、彼の生きる社会の記号体系に準拠して意味をみいだすことである事は、先に見た通りであるが、もっと話を広げれば、人々が、外なる世界を自分の意識に“represent”する過程—それは、ある物事が“natural”だと意識にのぼり、ある事柄は抑圧されるか、無視されるか、意識にすらのぼってこない過程なのである。もっとひらたくいえば、歴史のテキスト—コンテキストは、客観的に外なるものを指し示していると言うのは、イリュージョンにすぎないのであって、必ずそこには、意識する、しないにかかわらず、記述者の生きる社会、時代の“a mental set towards the world” (心的傾向)⁷⁾ が介在し、その記述に取捨選択が行われているということである。

そこで、こうした意味での“イデオロギー性”をもっと具体的に理解するために、今度は、Whiteではなく、Tzvetan Todorovを検討してみたい。Whiteが、本来歴史家でありながら、文学と歴史の境界を取り払ったことは既にのべたが、周知のごとく、Todorovは歴史家ではなく、本来文学の批評家である。そのTodorovが、今度は文学ではなく、歴史を対象とした、*La Conquête De L'Amérique: La question de l'autre*⁸⁾を1982年に出版した。これは、最初に触れたように、Greenblattによって、ニュー・ヒストリズムという言葉が初めて使われたのと同じ年である。しかし、1982年という同時性にもかかわらず、Todorovがニュー・ヒストリズムに影響されて書いたというのではなくて、むしろ、この著作はニュー・ヒストリズムの先駆的存在であると見なした方がいいとわたしは考えている。確かにいわゆる歴史家たちによって、史実の扱いが不正確だという批判を受けはしたが、後に見るように、Todorovは、極めてニュー・ヒストリズミックでありながら、同時にその枠に捕らわれず、自由に対象に向かい合っているところがあって、それがしばしば指摘されるニュー・ヒストリズムの欠陥を補っていると考えられるのである。

さて、Todorovは、新大陸の征服者、スペイン人たちが残した手紙、日記、王への報告書や、彼らを書いた歴史書などを分析しながら、彼らと原住民であるインディオたちとの間に、果たしてコミュニケーションがどの程度可能であったのか、なぜ歴史上悪名高い大量虐殺、文明の絶滅が起きてしまったのかを考察する。当然、新大陸においてインディオと何らかの関わりを持ったさまざまな人々が扱われているが、今は、ニュー・ヒストリズムにおける重要な概念である“イデオロギー性”を、具体的に理解する事がねらいであるので、なかでも次の三人、Columbus, Las Casas, Sahagúnを、Todorovがどのような取り上げ方をしているかに注目したい。

Columbusの思考の型を表す典型的な例として、Todorovがあげているのは、大陸捜しのエピソードである。Columbusは、自分のたどり着いたキューバこそアジア大陸の一部だという確信があるために、それに反するような情報はす

べて取り除こうと決意する。インディオは、当然そこは島だと言うのだが、Columbusは彼らを大陸を島だと間違えるような“bestial men”だと決めつけてしまい、あげくの果てに上陸したときには、「紛れも無くここは大陸にして島にあらず」⁹⁾ という誓いを立てさせ、これに反した事を言う者は、舌切りの刑を言い渡すとまで言ったという。Columbusは「真実を探求することではなく、むしろあらかじめ真実だと分かっているものの確証を見いだすこと」¹⁰⁾しかできなかったというわけである。このような思考型式は又、他者の言語への無関心となって現れていることをTodorovは指摘している。インディオの言語に接した時のColumbusは、「言語であることは認めるが、相違があることは信じようとしなしか、あるいは、相違は認めるが言語であることは認めない」¹¹⁾と言った態度を取ることはできない。このような言語への無関心、あるいは、拒絶反応は、Columbusが自分とは違う意味体系を持った他者の存在を全く認知出来ないことを示していると思われる。

さて、Columbusにおいては露骨な形で現れた特質が、何も彼固有のものではないことは、Todorovが扱う他の人物たちを見ていけば明らかである。スペインのドミニコ会派伝道師で、『西インド諸島史』とか『西インド諸島の破壊についての簡潔な報告』などを書いた歴史家であるBartolomé de Las Casas(1474-1566)。彼は、神は人間を自分の姿に似せて創造されたというキリスト教の根本原理に基づいて、インディオもスペイン人も人間として自由かつ平等であると考え、インディオの権利を擁護し、彼らを奴隷にすることに反対した人物である。しかし、大虐殺の歴史に登場する人物としては、特筆に値するこのLas Casasですら、Todorovはインディオを他者として認識できてはいなかったことを指摘する。つまり、Las Casasの“人間”は平等だという主張は、あくまでもキリスト教の名のもとになされているのである。つまりここでの“人間”という概念は、キリスト教徒という概念に等しく、しまいにはラス・カサスには、インディオの最大の特徴が、柔順で温厚というキリスト教的美徳を備えていることであるというふうに見えてしまう。人種差別主義者と

違って、Las Casas は、人種の隔たりを越えて、スペイン人とインディオを平等だと主張しただけではなく、更に、スペイン人の方を、キリスト教の教義にもとる異教徒、「悪魔」とみなし、一方、インディオの方こそ、真のキリスト教徒、「柔順な羊」とすら見てしまうのである¹²⁾。ここに Todorov は、“差別の偏見”ではなく、“平等の偏見”¹³⁾を見るのである。インディオを悪魔と見たキリスト教徒たちと一見全く反対の立場にあるように見えるけれども、実は「概念化」(“conceptualization”) が全く同じまなものである。つまり問題は、どちらの場合も、他者を認識する時の「準拠の枠組み」(“the frame of reference”) がまさに同じだという点である¹⁴⁾。そのために、Las Casas は、差別主義者同様、結局は他者を他者として理解できぬという結果が生じてしまったというわけである。

言説のこのような分析の仕方は、既に明らかなように、人間が物事を概念化する際に働く思考の枠組みといった極めて広い意味でのイデオロギー観に基づいたものであるが、とりわけ、アメリカ文学を論じるものにとっては、興味深いものがある。と言うのは、人種の問題を避けては通れないアメリカ文学批評、また、男女の不平等を問題とするフェミニズム批評、又、それらと深い関わりをもったキャンノンの問題などを論じる際に、このような視点は、極めて貴重な示唆と警告を提供しているように思えるのである。差別と偏見を批判する平等と自由の言説も又、結局は差別的言説と同じ思考の枠組みから一步もでていない危険性がありうることを、我々は認識しておく必要がある。と同時に、こうした危険性に我々の目を開かせてくれたニュー・ヒストリシストたち自身が、今度はひるがえって、自らの言説もまた、その批判を免れて外なる安全な場に立っていることはありえないわけで、ニュー・ヒストリシストは、ある意味で常に危険な綱渡りをやっているようなところがあると言わざるをえない。

さて、Todorov が扱う中でも最も注目すべきなのは、Bernadino de Sahagún (1494-1590) である。彼はフランシスコ会修道士で、『ヌエバ・エスパーニャ諸事物概史』を書き、「文化人類学の先駆者」とか「中南米民族学の

父」とか呼ばれている人物である。彼の『概史』に関して特記すべきことは、同時代のほかの人々が残したメキシコに関する記述と違って、原住民によって提供された情報が極めて忠実に記されているということである。それゆえに高い評価を受けてきた Sahagún であるが、それにもかかわらず、というか、それであるからこそ、Todorov は、その評価に疑問を抱き、一層分析の意欲をそそられたように見える。わたしには彼の分析の方法そのものが、極めて興味深いので、ここで次のようにまとめてみたい。まず『概史』は、Todorov によると、大体次のような三重の構造をもっている¹⁵⁾。

- (1) ヌエバ・エスパーニャ文化についての情報—情報提供者の声=ナワトル語
- (2) Sahagún による自由訳=スペイン語
- (3) 挿絵

このようにナワトル語のテキストとスペイン語のテキストが、一見明確に区別されているように見えるのだが、そこに、Todorov は、区別ではなく、二つの声の「相互作用」を読み取るのである¹⁶⁾。表の番号は上記の『概書』の各部分に相当する。

(2)	プロローグ, 端書き, 序文, 補い, 《著者の叫び》	情報提供者へのサアグンの介入
(2)	アステカの神々にローマの神々を対応させた標題	情報提供者へのサアグンの介入
(2)	翻訳, 特に神々についての訳語「神」という訳語と「悪魔」という訳語を同一物にたいして交互に使う。	サアグンへの情報提供者の介入
(1)	アンケートの質問表に基づく構成, 特に神についての部分ヨーロッパ的の切り取り方 主題の選択	情報提供者へのサアグンの介入
(1)	主題の変更, 特に人間, 自然に関する部分	サアグンへ

		の情報提供者の介入
全体の構想	スコラ的知の集大成 百科事典、書物	サアグン

この分析から明らかになることは、いかに Sahagún が (1) と (2) を截然と区別して (1) を残そうとする良心的な歴史家であっても、何らかの形で介入が起こってしまうということと、同時に何らなすすべもなかったかに見えるアステカ人自身が、恐らく彼らの全く意識しないところで、Sahagún に対して働きかけを行っているということである。つまり、たとえわずかな痕跡に過ぎなくとも、Sahagún の歴史書を一つの場として、二つの文明の対話、交流が見いだせるというのである。

以上の分析の過程がわたしにとって興味深いのは、これはまさに Mikhail Bakhtin の小説分析の応用ではないのかという点である。本書では、一度だけエピローグで「Bakhtin 的言い方をすれば」と断って、“exotopy”という言葉を使っているにすぎないのであるが、そもそも 1981 年に Bakhtin の解説書¹⁷⁾を書いた Todorov にしてみれば、それはそれ程驚くことでもない。従って、Todorov にこの『アメリカの征服』を書く着想を与えたのは、Bakhtin の小説論ではなかったかというわたしの主張もあながちの外れではないはずである。今ここで Bakhtin の小説論を詳しく説明する余裕はないが、簡単に言うと、Bakhtin は、本来我々の発するどんな言葉も対話的である、つまり、他者に向けられたものだと考える。

生きた会話における言語は、その後続くべき返答を明確に志向している。つまり返答を喚起し、予期し、返答の方向に沿った形の構造をとる¹⁸⁾。

従って、Bakhtin にとって、小説というジャンルこそは、ポリフォニーの世界、

つまり、作者一人の一方的な価値観や、世界観の押しつけに抵抗し、さまざまなタイプの言説が複雑に絡み合いながら現出する世界なのである¹⁹⁾。小説を分析すること、それは、直接話法、描出話法、自由間接話法、パロディなどに注目しながら、一つの言説の支配に抵抗し、顔をのぞかせる様々なタイプの言説を見極めることである。Bakhtin のこの小説観とそれに基づいた小説分析の方法を、小説にではなく、歴史的言説に試みたところに、Todorov の新機軸があったと思われる。

Todorov のねらいは、スペイン人たちが、ヨーロッパから新世界に持ち込んだ思考の枠組みを捨て切れなかったことを指摘するとともに、彼らが残した言説に、彼らが絶滅に追い込んだインディオたち自身の言説の痕跡を見いだすことでもあったと言えるのではないだろうか。新大陸征服の歴史は、強力なパワーをもったヨーロッパ的イデオロギーが勝利し、ヘゲモニーを確立した“モノロジック”な世界であったことは事実であるにしても、そこに残された歴史書が言語で書かれたものである限り、図らずも、小説同様、抑圧され、殺された他者の声が聞き取れるのではと言うのが、Todorov の着想であり、願いではなかったかと思われるのである。

以上見てきたように、Todorov は、境界を超えて、歴史的言説に文学分析の方法を持ち込んだわけであるが、その基盤となった文学観が、Bakhtin 的な極めて重層的、多層的なものであった為に、ニュー・ヒストリシズムの批評が陥りやすい危険性を免れたものになっていることを、ここで強調しておきたいと思う。と言うのは、Walter Benn Michaels らの例にみるように、ニュー・ヒストリシストの手にかかると、登場人物も、小説世界も徹頭徹尾、特定の一つのイデオロギーによって支配されているという、あまりに決定論的な結論が引き出されてしまうことへの反発が、しばしば聞かれるからである。こうした批判に答える鍵となるのが、やはり Todorov のいう「他者の発見」(“the discovery self makes of the other”)²⁰⁾ではあるまいか。Carolyn Porter も同じような問題意識から出発して、実に興味深い提言を行っているので最後

にそれに触れておきたい²¹⁾。

Porter は、Greenblatt や Steven Mullayney が、“anecdotes”を語る手段として、植民地文化を利用していく論じ方を厳しく批判している。というのは、彼らによって“alien culture”の“抹殺や否定”が、歴史的必然として、前提とされているのみならず、「植民地文化を、単に例として引き合いに出すために“襲撃”し、その後“単に植民地的でしかないもの”として、再び周縁に追いやっている²²⁾」という意味で、かれらの論文そのものが、“抹殺や否定”を再演しているからだと言う。そこで彼女が提言するのが、歴史的言説や、既にキャンノンとして認められている文学作品をすら、“flat”な言説の場²³⁾として読んでいくことなのである。つまり、支配的な声と従属させられた声とが、上下の関係ではなく、同じ平面を占めているという意味で“flat”なのである。そうして初めて、支配的な言説によって周縁に追いやられたはずの他者の声が、前者を「屈折させたり、ゆがめたり、時には占有さえしている²⁴⁾」ことが理解できるのである。私が先に図表化してみた Todorov の分析は、まさに Porter のいう“flat”な言説の場を構成していたことが既に明らかであろう。言うまでもなく、Porter も決してニュー・ヒストリシズムの立場を否定しているわけではない。むしろ彼女の歴史観は、我々が White に見たような歴史観をすでに受け入れているとあってよい。そうであるからこそ、彼女の提言は我々に意味をもってくるのである。異質な言説の“対話”を読み取ることを可能にしてくれる、より多層的言語観が取り入れられるとき、我々にとって、ニュー・ヒストリシズムはまだまだ可能性に富んだ方向を指し示しているように思われる²⁵⁾。

注

- 1) Richard Lehan, “The Theoretical Limits of the New Historicism,” *New Literary History*, Vol. 21, No. 3 (1990), p. 535.
- 2) H. Aram Veesser (ed.), *The New Historicism* (New York: Routledge, 1989)
- 3) Hayden White, *The Content of the Form: Narrative Discourse and Histor-*

- ical Representation* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1989), pp. 6-7.
- 4) *Ibid.*, p. 9.
 - 5) *Ibid.*, p. 20.
 - 6) Brook Thomas, *Cross-examinations of law and literature* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), p. 5.
 - 7) Hayden White, p. 192.
 - 8) Tzvetan Todorov, *The Conquest of America: The Question of the Other* (New York: HarperPerennial, 1992), transl. from the French by Richard Howard.
 - 9) *Ibid.*, pp. 21-22.
 - 10) *Ibid.*, p. 19.
 - 11) *Ibid.*, p. 30.
 - 12) *Ibid.*, p. 163.
 - 13) *Ibid.*, p. 165.
 - 14) *Ibid.*, p. 166.
 - 15) *Ibid.*, p. 223.
 - 16) *Ibid.*, pp. 227-237.
 - 17) Tzvetan Todorov, *Mikhail Bakhtin: The Dialogical Principle* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1984), transl. from the French by Wlad Godzich.
 - 18) M. M. Bakhtin, *The Dialogic Imagination* (Austin: University of Texas Press, 1981), ed. by Michael Holquist, and transl. by Caryl Emerson and Michael Holquist, p. 280.
 - 19) *Ibid.*, p. 263.
 - 20) Tzvetan Todorov, p. 3.
 - 21) Carolyn Porter, "History and Literature: "After the New Historicism,"" *New Literary History*, Vol. 21, No. 2, (1990).
 - 22) *Ibid.*, p. 261.
 - 23) *Ibid.*, p. 265.
 - 24) *Ibid.*, p. 268.
 - 25) 本稿は、1992年12月アメリカ文学会関西支部大会フォーラムにおいて発表したものに加筆補正をしたものである。